小悪魔カノジョ

KOAKUMA-KANOJO

featuring かたい

089タロー

原作・挿絵 Hisasi

2DB

二次元ドリーム文庫

試し読み版

序章　気が付けば、大乱交　006
一章　片思いの女の子に一服盛ろうとしたのだが　010
二章　もらった薬がヤバい代物だった件　028
三章　幼馴染がなんだかおかしくなってるみたいで　064
四章　とんでもない子たちに目をつけられたのかも　100
五章　お騒がせなヤツもまとめて大乱交　129
六章　なんだか大事になってしまいまして　167
七章　平穏はまだまだ先になりそうです　208

❤Character❤

エレナ・トゥエル・ファブリージア

一樹が片想いしているエルフの美少女。おっとりとして落ち着いた雰囲気の、容姿も言動もまさにお嬢様。制服を大きく押し上げる巨乳が周囲の目を惹いて放さない。

眞嶋響（まじまひびき）

ヴェルス魔法学園附属校に通う一樹の幼馴染。誰とでも打ち解ける気さくな性格で、感情表現豊かな表情が魅力的な美少女。小柄だが実はかなりスタイルがいい。

奥村一樹（おくむらかずき）

滑り込みでヴェルス魔法学園附属校に入学したごく平凡な少年。入学試験の際に出会ったエレナに一目惚れしたまま想いを伝えられずにいる。

一章　片思いの女の子に一服盛ろうとしたのだが

いわゆる超常的な力――魔法。
その存在が広く認知され始めたのは、およそ百年前の出来事だった。
近代化が進む社会において、お伽話（とぎばなし）、もしくは与太話とされていたものは、公表された途端、当然ながら一大センセーションとして世界中を震撼させた。
時を同じくして認知されたのは、人間によく似た異種族の存在。彼らは人類史の陰に隠れながらも確実に生き延びており、存在が知れるや否や、瞬く間に衆目を集めた。
悲しいかな、それがきっかけで世界は一度荒れ、力や利権を奪い合う大戦へと繋がった。
けれどまあ、その手の出来事は、これまでとてままあった話で。
人類は再び折り合いをつけ、どうにかこうにか世界は概（おおむ）ね平和を取り戻した。
世界情勢はまさしく激変し、そこかしこに魔法があるのが至極当然となりつつあった。
ライフラインから商業、工業、学業および芸術や文化、果ては軍事面にまで、部分的にだが魔法が組み込まれつつある。
近年では、魔法の素養のある人物を一所（ひとところ）に集めて育成するという、魔法職専門の教育機関まで登場していた。
閉鎖的だった異種族たちも、徐々にだが人間と交流を持つようになり、自治を認められ、

現代社会に溶け込んでいった。
とは言え彼らは未だ希少で、その目で直に見かける機会は、現代日本においても決して多くはない。
そんな日本のとある片隅に、その学園は存在していた。

＊

国立ヴェルス魔法学園、附属校。
緑に囲まれたこの学び舎では数多くの生徒たちが魔術を学んでいる。特殊な才能を見出された若い少年少女たちが、未来の魔法職を担うべく魔法体系や術式などを学業として身につけていく場所だった。
その魔法学園に早朝から足を運んでいたのが、なんの変哲もなさそうな学生服姿の少年、奥村一樹だった。
「ふあぁぁ……ふぅ、今日もよく晴れそうだな」
路上で欠伸を噛み殺しつつ、肩にカバンを乗っけながら歩く。
中背で若干痩せ気味、顔は並程度の平々凡々な男子学生である。さして得意な科目などはなく目を引くところなど特に見当たらない、どこにでもいそうな普通の少年だった。
ヴェルス魔法学園に入ったのも、ちょっと素養があったくらいで「無いよりはマシ」という程度の理由から。
そんな自分がここに通うことになったのが、一樹自身今でも不思議に思うくらいだった。

「あれ？　一樹」
校門まであと少しというところで。
一樹は後方から声をかけられ、首だけで後ろを振り返った。
「おはよー。今日も朝からいい天気だねぇ」
同じ学園の女子生徒が小走りで近寄ってくる。
日本人らしい黒髪をピンクのリボンでまとめたポニーテール。快活そうな丸く大きな瞳。爽やかな笑顔を張りつかせた気負いのないフレンドリーな表情。
毎日と言っていいほど顔を合わせるクラスメイトが、そこにいた。
「最近早いね。どうしたの急に？」
「なんだ響か……別に。いつも通りだよ」
一樹が素っ気なくスルーすると、女子生徒は見事な膨れっ面を作り、前に回りこんで絡んできた。
「なんだとは何よっ、こんなに可愛い女の子が一緒に歩いてくれてるっていうのに！」
「可愛い子って、どこですかー？」
「うがっ、も――――っ！」
背伸びして歯軋(はぎし)りしてみせる彼女は、響――眞嶋(まじま)響という名の女の子だった。
砕けた態度からも分かるように、二人は友達感覚の関係だった。家が近いため幼少からの幼馴染でもある。学校もずっと同じだったため腐れ縁めいた間柄とも言えた。

そういう二人の会話なので色気も素っ気もありはしない。気負うことなく肩を並べ慣れた様子でまた歩きだす。

「あんたとじゃなく、早くカッコいい彼氏作って登校したいよ」

「彼氏じゃなくて悪かったな」

「「はぁ～っ」」

憎まれ口を叩きあい、互いにため息などついてみる。

校門までの道のりを歩きながら、一樹は半眼となり軽く呆れる。

（なにが可愛い女の子だよ。そういうことは自分でいうなっての）

隣の彼女をチラとだけ盗み見る。

幼馴染の自分が言うのもアレなのだが。響は十分可愛い女の子だった。顔立ちは文句なく整っていて明るい笑顔がよく似合うし、ぱっちりとした大きめの瞳は形も綺麗で愛くるしい。どちらかと言えば童顔に近いが、嫌味のない爽やかな雰囲気が男女を問わず人気を博していた。

これでスタイルがよかったらなぁ、などと時々からかうこともあるが、実は地味に悪くないのを長い付き合いゆえ知っている。服の上からでは分かり辛いが胸は案外あるみたいで、スカート越しに浮き出るお尻は豊かな丸みを帯びきゅっと上向きだ。クラスの女子たちと比較しても引けを取ることはまずないだろう。

太腿も白く健康的に肉がついていて、女の子らしくない、とは誰も言わないはず。かく

言う自分もふとした瞬間に意識してしまうことがある。
それでも素直にそう言えないのは友達だと思っているからだ。昔からの知り合いで遠慮なく口喧嘩できる関係だ、妙なことを言えば笑われるか馬鹿にされるか、あるいは友達でいられなくなりそうだ。
それに何よりも今の一樹には、もっとほかに注目すべき人物がいるのだった。
「一樹はさー、好きな人いないの？」
何気ない様子で隣を歩く響が聞いてくる。
「い、いるわけないだろ」
見透かされたような気になり、一樹はプイとそっぽを向く。
すると、その時だった。
二つの人影が目の端に留まり、その内の一つが少年の気を惹いた。
（おお来たっ！　今朝も時間通りっ！）
道端であるのも忘れ、立ち止まってそちらを凝視する。
まず目を惹くのは金色の長い髪。首の後ろで二つに分けて三つ編みになって揺れている。今日日異国人も多い日本だが、人間にはあり得ないくらいの透き通った黄金色の髪だった。
顔立ちは柔和ではっと目を見張るくらいの美形。少しタレ目の紫の瞳はつぶらでくりっとして人懐っこそう。あどけなさを残す造形は純真無垢な妖精を思わせ、道を歩いているだけなのに周囲がきらきらと光って見えそうだ。

女子用の緋色のブレザーを着ている点から、同じ学園の生徒であるのは一目瞭然。
身長は低めで年齢にしてはちょっと小柄か。けれど体形はとても女性的で、着衣を押し上げる胸の膨らみは非常に豊満で歩くたびに揺れている。お尻も大変ふくよかなようで細いくびれがより肉付きをアピールしていた。一目で発育がよいと分かる抜群のスタイルを誇る女の子だった。
エレナ・トゥエル・ファブリージア。
遠く異国から来た転校生であり学園きっての美少女。男子生徒はおろか、先生方ですら美人だと称する同学年の女子生徒である。
（エレナさん、今日も綺麗だなぁ。早起きした甲斐があるってもんだぜ）
一樹が早朝から登校するのも、ご尊顔を拝見する時間を少しでも増やしたいがためであった。
友人と談笑するエレナの耳が、歩調にあわせて小さく上下に揺れ動く。
その特徴的な長い耳は、彼女が異種族である何よりの証拠。森と自然を友としてきた魔法にも長ける希少な種族、エルフであることを示していた。
エルフとは妖精の末裔であり、大半の者が人間よりも美形らしい。エレナもまたエルフだからか一際目を惹く美貌を誇り、こうして遠巻きに見ているだけで一樹は眼福だった。
「――ぷっ」
「うわっ!?」

我知らず見惚れていたところへ、幼馴染の馬鹿にした顔がぬっと視界に割り込んできた。
「あっそー、そーゆーコト。ムリムリ、一樹なんて相手にされないって」
「な、何もいってねーだろっ！」
大慌てで否定したが後の祭りなのは明らかだった。長い付き合いだ、目当ての女の子も早起きの理由もバレてしまったに違いない。
「エルフってー、誰にでも優しく尽くしちゃうんでしょ。それにエレナって可愛いしスタイル抜群だし、男がほっとくわけないじゃん」
幼馴染はしたり顔で「とっくに恋人くらいいるだろう」と暗にほのめかしてくる。
認めたくはないが一樹は反論できなかった。
（そりゃ、エレナさんくらい美人なら声かけるヤツなんて山ほどいるだろうし、俺なんて眼中にないだろうけどさ……）
それでも意識し続けてしまうのが色恋沙汰と言うものだろう。
片思いをするようになってから、そろそろ一年と四ヶ月あまりとなるだろうか。
少年の脳裏に、初顔合わせの瞬間が蘇る。
――一樹とエレナの出会いは、入学以前、受験日当日での出来事だった。
その日、彼は入試会場に向かいながら、道端を俯いて歩いていた。
わずかばかりの才能を見出され魔法学園を受験する運びとなりはしたものの、周囲との落差はとっくに気づかされており、この頃にはもう落第への不安しかなかった。

仮に受かってもロクな魔法も覚えられないんじゃ――そう思えてきて、半ばヤケクソで使ったこともない魔法を使ってみた。そう、今まさに歩いているこの道、この場所で。

無論、満足に発動すらしなかった。聞きかじりの知識で魔法が使えれば苦労はない。分かっていたし悔しがる気力すら湧きはしなかった。

問題だったのは、術の失敗で泥が跳ねて通りかかった車を汚してしまったことだった。

一樹は肝を冷やした。相手は黒塗りの高級車、乗っているのはきっと金持ちかエリートに違いない。ゴツいお兄さんでも出てこようものなら脱兎のごとく逃げるほかなかった。

だが車から降りてきたのは同じ歳くらいのエルフ族の一人の美少女。

それこそがエレナであり、これが初顔合わせの瞬間だった。

彼女のあまりの美しい容姿に呆然とした一樹だったが、我に返って謝り倒した。少しも怖そうに見えなかったが、こんな綺麗な子に嫌われたくないと思ったのだ。

「そんなに謝らないでください。分かります、初めての魔法って、大抵失敗しちゃいますよね」

「え、き、君もこの学園に？」

「えっと、それは、まだ分かりませんけど……その時は、どうか仲良くしてくださいね」

エレナは一樹を笑顔で許し、恥ずかしそうに微笑みながらペコリと行儀よく頭を下げた。

それだけで一樹の胸は跳ねたが極めつけはその直後だった。エレナは簡単な魔法を使い車の泥を落とそうとしたのだが、履き慣れない革靴が祟ってか、バランスを崩してしまっ

たのだ。
　咄嗟に手を伸ばした一樹は下敷きとなって一緒に倒れた。痛みはあったがそれどころではなかった。小柄で華奢な体躯に反して不釣り合いなほど大きな胸が、彼の胸板にむにゅりと強く密着してきたのだ。エレナのスタイルが抜群なことを一樹はこの時、身をもって知った。
「ご、ごめんなさい、大丈夫ですか？」
「いやあの、ごめん、ワザとじゃないんだ！」
「？　何がですか？」
　赤面し慌てる一樹をエレナは不思議そうに見つめてきた。そして、胸が当たっていることに気づいた途端、怒るでもなく赤面して目を逸らしたのだ。
　その瞬間に一樹のハートは参ってしまった。無垢で優しくおおらか、天然なようで恥じらいもする、そんな彼女に一瞬で心奪われてしまっていた。
　彼女ともっとお近づきになりたい、一緒の学園に入りたい！　その一心から一樹は全身全霊で受験に挑んだ。人間何がきっかけで覚醒するか分からないもので、その日は異様に頭が冴えて試験を見事クリアしてみせた。
　どうにか滑りこみで合格した彼は、しかし、すぐにはエレナと再会できなかった。不合格だったのか、あるいは別の学園を選んだのか。分からなかったが彼女はヴェルス魔法学園にはいなかった。

それから一年が過ぎ二年生へと進級した直後、ようやく再会の時は訪れた。エルフの国からの転校生という形で、再びエレナがこの学園にやってきたのだ。

一樹は舞い上がり恋慕の炎を今一度燃やしたが、悲しいかな、彼女は隣のクラスに入り、常に周りから注目を浴びて近づけるチャンスなど滅多に来なかった。話せたとしてもごくわずか。自分など所詮モブキャラ同然なのだと改めて思い知ったのだった。

――彼女の転入から数ヶ月が過ぎ、そろそろ初夏という頃だが、出会った当時に抱いた気持ちは今も色褪せず残っている。朝早く登校し遠巻きに眺めているだけの毎日、それでもいつかお近づきになれればと願わずにはいられないでいた。

（分かってるさ、俺なんて不釣り合いだってことくらい。遠くから見てるしかないだけのヘタレだし、成績だって大したことないし）

それを承知で小馬鹿にしてくる幼馴染がちょっと憎い。自覚はあるのだからいちいち言わなくてもいいのにと思う。

むすっとして押し黙っていると、前を歩く響がくるりと振り向いて言った。

「……もー。いつもは突っかかってくるくせに……」

一瞬見せたその表情は、どこか柔らかく気遣わしげだった。しょうがない奴、とでも言いたげに目を瞑り軽く首を振る。

そして半眼でニヤリと笑い、カバンに手を入れゴソゴソと何かを漁り始めた。

「それだけ本気なら……」

響がばっと取り出したのは。
半透明でウサギの顔型の蓋を持つ、長さ十センチ程度の細長い小瓶だった。
「じゃーんっ♪　今、女の子の間で密かに流行中の――惚れ薬！」
惚れ薬。その単語を耳にした途端、一樹はあからさまに胡乱な表情を浮かべた。
「げ……嘘くせ……」
「何よ、その嫌そーな顔は」
「いや、だってさ……」
気なしに小瓶を受け取った一樹は、怪しい儲け話でも聞くような目で陽光に透かしつつそれを眺める。
玩具みたいな瓶の中身はピンク色の液体らしい。正直、色からして胡散臭い。良薬口に苦しと言うが、これは逆に外面のよいエセ薬に見える。
「コレ……効くの？」
一樹が低い声音で聞くと、響は「わかんない」と答えた。
「でも告白する勇気ないんでしょ。おまじない感覚で使ってみたら？」
ドヤッという顔で言う幼馴染の感覚が一樹にはいまいち分からない。担ごうとしているのではと疑いたくもなってくる。
（でもまあ、魔法のアイテムなんてモンだってあるって話だしな。ひょっとしたら……）
魅了の魔法も実在するという話だ、眉唾物だが可能性はあるかもしれない。

この薬を使って憧れのエレナと恋仲になれたら……そんな淡い期待感がむくむくと首をもたげ始める。

それでもヘタレゆえに迷う少年を、幼馴染の勝気な笑顔が後押しした。

「早くしないと取られちゃうよ？　エルフってだけで注目されてるし美人なんだからみんな狙ってるよ？」

「う……ううん……」

そう言われると押し黙るしかない。先に誰かが恋人となれば自分の出る幕など二度とは来るまい。古今東西、男女の恋愛とは早い者勝ちと相場は決まっている。

未だ釈然としないものの、一樹の心中の重い腰は少しずつあがりつつあった。

＊

「奥村くん……用って何かな？」

（な、成り行きのまま呼び出してしまったあああ!!）

その日の放課後、校内のとある無人の教室で、一樹はガチガチに緊張していた。

実習用の広い部屋には今は彼ともう一人だけ。人懐っこそうな笑みを浮かべて目の前に立っている。

入学前から憧れていたエルフ族の美少女、エレナ。

ままよとばかりに彼女を呼び出し、こうして二人きりになったことを、今は若干後悔している。

（なに話すか考えてなかった。畜生、非モテ男子の悲しい習性かぁ！）
せめてそれっぽい話題くらい用意しておくべきだったが、舞い上がっていたせいか完全にノープランだった。
「えっと、立ち話もなんだし、奥村くんも座りませんか？」
「は、はいぃ……！」
馬鹿みたいに声が裏返ってしまう。
勧められるまま机を挟んで向かい側の席に座る。エレナも座り興味深げにこちらを見てくる。
視線を意識して一樹はますます緊張した。
こうして向き合うと彼女の美しさが改めて分かる。キラキラと光る混じりっ気なしの金色の髪、透き通るような白い肌、柔和で人懐っこそうな整いすぎるほど整った顔立ち、まさにお伽話で聞く妖精さながらの美貌だった。
と、こちらが落ち着かなく身動ぎしていると、彼女は両手を椅子につき、軽く身を乗り出して覗きこむような姿勢となった。
瞬間、一樹は知らず頬を赤らめる。
（うわぁ、で、デカっ……こうして見ると、ほんと発育よすぎっ……）
両腕に左右から押された胸が、プルンと揺れながら窮屈そうに前に出てくる。近くで見ると並外れたサイズだと分かり無意識に目が吸い寄せられる。びっくりするほど柔らかな

動きはブラをしているのか怪しいほどで、若い男には目の毒以外の何物でもなかった。
椅子に乗ったお尻も、それとなく見るとバストに見合った肉付きをしている。響も言うように巨乳巨尻のナイスバディだ。そのくせ小柄でウェストはきゅっと細いのだから、その色っぽさは反則級だ。
もしも恋人になれれば、この豊かな胸に触れる日が来るのだろうか。揉んで舐めて吸って頬ずりして、アレを挟んでしごいたりなんかも――若者らしい真っ直ぐな欲求が、緊張の最中ですら無遠慮に沸きあがってくる。
（ああ馬鹿なに考えてんだ、呼び出して早々胸なんて見てたらソッコー嫌われるぞ普通！）
慌てて首を振り気を取り直す形で隠し持ったペットボトルを握る。そうだ忘れてはいけない、これを――惚れ薬入りのこのドリンクをさりげなく彼女に飲ませることが、今回の最重要ミッションなのだから。
しかし一樹は一抹の不安――と言うか罪悪感を覚える。
エレナと恋仲になりたい、その一心から怪しげな薬に頼ろうとしているが、それは邪道ではないのか。二次元で言うところの洗脳モノと大差ないのではないのか。だとしたら自分は彼女を傷つけようとしていることになる。
優柔不断ゆえか今さらそんな心配をする自分が少し嫌になる。いっそここで思い切って告白して玉砕した方がマシなのではないか、そんな風にふと思う。
そんな中不意に、彼女の方から缶入りドリンクを差し出された。

「あ、そうだ……これ、喉が渇くと思って」
「えっ、あっと……い、いただきますっ！　あ、それじゃ、俺も……」
まさか相手も飲み物を用意していたとは思わなかった。意表を突かれて内心焦ったが、一樹も慌てて惚れ薬入りドリンクを手渡す。
飲み物を交換しあうと、エレナは「ふふふっ」と小さく笑う。
愛くるしいその笑顔を見て、一樹は胸に痛みを覚えた。
期せずして上手い具合に運んだが、このまま彼女が惚れ薬を飲めば、望んでもいないのに自分を好きになるかもしれない。このままでいいのか。男としてアリなのか。彼女の笑顔を見た途端、なおのこと意思が揺らいできた。
そんなこととはつゆ知らぬ様子でエレナは軽く目を伏せる。
「私……ずっと、奥村くんと話したいなって、思ってたんです」
「っ――――え……？」
渡されたドリンクをゴクリと一口飲んだ一樹は、唐突に出た台詞に思わず耳を疑う。
見ると彼女は、チラチラとこちらを窺いながら、照れたように少し赤面していた。
「私、この学園に来たとき、教室が分からなくて迷ってたら、奥村くんが教えてくれて……そのとき私、親の都合で転校してきたばかりだったから……」
一樹は目を丸くした。確かにそんなこともあったが覚えていてくれるとは思わなかった。自分はモブキャラではなかったのだと勇気づけられた気分だった。

「エルフは珍しくて、みんな私と距離を置いてるみたいに見えて……話しかけてくれたとき、すごく嬉しかったんです」

思い出しながら語る彼女。そういえば出会った時にも見知らぬ場所で緊張していた様子だった。故郷を離れ、周囲は人間という異種族ばかり。今でこそ慣れて見えるが当時は心細かったのだろう。

一樹が黙り込んでいる中、エレナは伏し目がちに薄く頬を染め、ドリンクを手にニコッと微笑んだ。

「奥村くんって、優しい人だなぁって……ずっとお礼がいいたかったけど、クラスが違ってなかなかお話できなくって……」

ありがとう。奥村くん。

彼女の口からそう告げられた瞬間、一樹はドキッとした。

同時に激しく後悔し猛省する。

（なんていい子なんだ、俺なんかのこと覚えててくれて、些細なことなのに喜んでくれたりして……！）

エルフは優しく温和な一族で恋人には一途に尽くすと聞くが、その性質の一端を見た気がした。誠実で柔らかなこの雰囲気こそが人に好かれる所以に違いないと思う。

それなのに自分ときたら、勇気がなくて告白できずにいるばかりか、いかがわしい薬なんかで無理やり惚れさせようとしている。

そうこうする間にもエレナはドリンクに口をつけようとしている。それがなんなのか、飲めばどうなってしまうのか、疑いもせずに。

「――えっ、お、奥村、くん……⁉」

びっくりした彼女の声。

（やっぱり……こんな薬に頼ったらダメだ！）

瀬戸際で思い留まった一樹は寸前でエレナのボトルをひったくり、自分で中身を呷った。飲ませるくらいなら飲んでしまえ。どうせ自分はとっくに惚れている、飲んだところで今さら同じだ。中身を知られる前に証拠隠滅をしたいという多少の打算もなくはなかった。

エレナは目を丸くしているが、怒ったというよりは単に驚いているのだろう。急に奪ったのは悪かったが謝って許してもらうほかない。

ともあれこれで最悪の事態は避けられたはずだ。あとは野となれ山となれ、だ。

が――

「――――う……ぐっ……！」

「きゃあ！　お、奥村くん⁉」

眩暈が一瞬襲ったかと思いきや、いきなり膝がガクンと折れた。全身がみるみる熱を帯び心臓の鼓動が速くなっていく。鈍い音を立て転がっていくのは手から落ちた飲み止しのボトルか。

医学の知識のない一樹にも異変が起きているのだと知れる。なんだ、何が起こった⁉

悲鳴をあげ大慌てで駆け寄るエレナ、彼女の黄金色の髪を目の端に捉えながら、一樹は呻き、震え始めた。

（こ、これは……っっ!?）

二章　もらった薬がヤバい代物だった件

（こ、これはっ……!?）

二人だけしかいない教室で、一樹は床にうずくまったまま、額から汗を滲ませていた。

突然のことに慌てふためいているエレナの姿が目の端に映る。心なしか頬が青ざめており、心配してくれていると分かる。

憧れの彼女に気遣われるのは悪い気がしない、どころか逆に嬉しいのだが。

お気持ちに甘えて介抱してもらうのは、ぜひとも避けたいところだった。

（く……なにが、惚れ薬だ……！）

小さく息を荒らげながら腰の前を隠そうとする。

一体何が起こったのか、一樹にはじきに察しがついた。

学生服のスラックスの前が、傍目にもそれと分かるくらい、はっきりと膨らんでいる。

恐らく薬の効果によって、はち切れんばかりに勃起しているのだ。

（これは、ただの精力剤じゃないのかっ!?　あ、頭が、くらくらしてきて……）

お門違いかもしれないが、くれた響に文句を言いたい。元より半信半疑だったが、よもや即発情するヤバい代物だったとは。つくづくエレナに飲ませなくて正解だったと思う。

とは言えこんな有様では、立ちあがるどころか動くことすらままならない。

「大丈夫ですか……ああ……！」
「だ、大丈夫……っ！」
不安げに覗きこむエレナは相当焦っている様子で、長い両耳がしゅんとしおれてしまっている。
「で、でも、苦しそう……私、人を呼んで……」
「はぁ、はぁ、え……いや……！」
好意はありがたいが、この状況で人を呼ばれたら変態扱いされてしまう。美少女と無人の教室で二人きり、おまけに思い切り勃起中、これで無罪だと誰が納得してくれるだろう。
なんとかバレないようにエレナさんを遠ざけないと。
そう思って目をあげた矢先に、さらなる不運（幸運？）が飛びこんできた。
（うわっ⁉　え、エレナさんの、ぱ、パンツ、が……！）
傍らに立ってオロオロするエレナのスカートの中が偶然見えた。上手い具合に、それはもうばっちりと。
（ぴ、ピンク色……うわ、面積小さっ……マズい、ますます硬くなって、このままじゃ……でもっ……！）
清純な外見に合うのか合わないのか、シンプルながらもなかなかに際どくて可愛い下着。
それも彼女が身を揺するたびにスカートの裾がひらひら揺れて、豊かなヒップが動くに合わせて股の部分が小さくなって。

（く、食いこみすぎっ、これじゃパンツどころか中まで……収まり、つかないっ……！）
視線を外すこともできぬまま一樹は必死に欲望と戦った。今すぐにでも刺激が欲しいがこの状況では自慰も叶わない。尿道はとっくに熱く潤いカウパーが下着をベトベトにしているが、今はとにかく耐えるしかない。
「ちょ、ちょっと休んでたら治りそうなんで、その、先に行っててください……」
「えっ……でも……」
強がって笑うしかできない一樹に、エレナは泣きそうな表情を向けてくる。
ところが。アメジスト色のその双眸（そうぼう）が、つと股間部に向いた瞬間、彼女は「はっ！」と表情を変えた。
「あの……苦しいのは、その……えっと……」
白い頬がみるみる色味を帯び、股間を見つめるその視線はそわそわと落ち着きなく泳ぎ始める。
（えっ、えっ……？　なにその反応、バレたのか……!?）
鈍い一樹にも察しがついた。股間のテントを見てこちらの状況を悟られてしまったのだ。
（終わった……二人きりで勃起してるなんて、どう見たって変態だ……！）
こみ上げた欲情もどこへやら、たちまち気分が消沈していきドヨーンとした空気が少年を包みこむ。薬を使って惚れさせるどころか告白すらできないまま嫌われるのか。こんなことなら呼び出すんじゃなかった、惚れ薬なんて貰うんじゃなかった、悲嘆と後悔とが脳

内でぐるぐる回り回る。
もう駄目だ、俺の学生生活は灰色確定だ。
半泣きになり、がっくりと肩を落とす一樹。
「あ、あの……奥村くん……」
その腕に、そっと触れる白くしなやかな掌があった。
「私に……手伝わせてください！」
見ればエレナが、眉を立てたキリッとした表情で覗きこんでいた。頬はまだ赤く恥ずかしいのは丸分かりだが、「やります！　任せてください！」という強い意気込みを感じた。
そんな表情もなかなかに愛らしく魅力的だが、もちろん意味が分からない。仮に治療するにしたってこれは病気と言えるのだろうか。そもそも治癒魔法なんて高度なものは簡単に使えるはずもないのに。
一樹が性欲を耐えている中、エレナは驚くべき行動に出た。
「はぁ、はぁ……っ――⁉」
白い指がそっと股間に伸びたかと思うと、すりすりとさすり、服越しに陰茎を刺激し始めたのだ。
突然の出来事に一樹は大いに慌てる。
「ええっ‼　なな、なにやってるの⁉」
「っ……こんなに腫れて、痛そう……」

一樹を椅子に座らせると、エレナはその前で膝をつき、彼の足を左右に開かせた。
再び指をすっと伸ばし、ぶくりと浮き出たサオに沿って蔓のように絡ませてしごく。
「お、大きい……熱くなって、震えて、ます……」
（そ、そんな、なにがどうなって……エレナさんが、俺のを……!?）
薬が脳にまで回っているせいか状況が上手く飲みこめない。触られている。勃起したペニスを。おずおずとだが、確かに両手の指で握って。
一体どうしてこうなるのか、分からないまま一樹は息を荒らげた。恥ずかしそうな上目遣い、緊張しきったエレナの表情が不埒な期待感を持たせ、欲望を膨らませる。
「は、初めてなので、上手くできないかもしれませんが……じっとしていてくださいね」
コクッと喉が鳴る小さな音。肩をひくりと震わせてから、彼女はジッパーに指をかけ開き、膨れ上がった中身を取り出す。
ビンッと勢いよく飛び出すのは、持ち主ですら恐ろしくなるくらいガチガチに硬化した勃起ペニスだ。自慢ではないがかなり大きい。水を充満した風船のごとく隅々まで腫れ上がっており、浮き上がって脈打つ血管は今にも破裂しそうな勢いだ。
一樹自身、（どうなってんだ）と内心驚く。これほどの状態は見たことがなく本当に自前なのか疑うほどだ。
「はぁぁ……す、すごい……」
エレナはつぶらな瞳を潤ませ驚愕とも困惑ともつかない表情で眼前のペニスを見つめる。

彼女の小さな掌ではとても端まで握り込めないが、そっと五本の指を絡め、優しく優しく慈しむようにサオの部分を緩く撫で擦る。

「こんなに大きく……苦しそう……それじゃ、始めますね……？」

長いまつ毛が軽く伏せられ金色の髪がふわりと揺れた。濡れた瞳と赤い頬、少し汗ばむ緊張した面持ち。ゆったりとさするペニスの先端に薄い紅色の唇が近づく。

「あぁ、すごい……これが、お、男の人の、におい……」

小鼻をヒクつかせ体臭を嗅いでから、そっと唇から舌を伸ばし、唾液の塊をとろりと垂らしてくる。初めて味わう得も言われぬ感触に一樹は「くっ」と小さく呻く。

「い、痛かったりしたら、いってくらさいね？　がんばりまふ、から……」

些細な反応に戸惑うエレナが赤い舌を伸ばしたままそう言う。

初々しい仕草に一樹はときめくも、さらなる刺激に彼は反射的にわなないた。伸びた舌がおずおずと迫り、濡れた亀頭をぺろぺろと舐め始めたのだ。

「うあっ、え、エレナさんっ……こんなっ……！」

温かくぬめった柔らかな感触がたちまち官能を与えてくる。異性を知らぬ未熟な男性器が未知の感覚にびくびくと痙攣する。

ずっと憧れてきたエルフの美少女に思いがけずペニスを舐められた。嘘みたいな状況に理解はまだ追いつかずにいる。

「れろ、チュプるッ……はぁ、こんなに膨らんでる……熱くて、味も、濃い……！」

快楽に跳ね震える肉棒の反応は、健気(けなげ)に刺激してくれているエレナを少なからず驚かせているらしい。
それでも彼女はせっせと柔らかな舌を動かし、丁寧に丁寧に鈴口を舐め、そして、
「チュプッ、チュプッ、はぁ――はむっ、クプちゅッ……！」
「うはあっ、え、エレナさん、うおっ……!?」
大きく唇を開けたと思いきや、赤く膨れ上がったカリを口の中に飲みこんでみせた。
一樹は堪(たま)らず腰を浮かせ初フェラチオの快感に惑う。彼女の口の中は熱く、舌と唇が這(は)わされた途端に溶けてしまいそうな官能が走る。初めてという言葉に嘘はないらしく不慣れな感は見て取れるも、経験皆無な童貞少年にはこれだけでも刺激が強すぎるほどだった。
「んっ、んっ、くぷ、クプちゅっ……」
歯を立てないよう唇でしごいて休まず舌を這わせ続ける彼女。俯き手で支えるその仕草には、気持ちよくしなきゃ、がんばらなきゃ、という精一杯の思いやりが見て取れる。
「んっ、んプッ――どぅ、れすか？　奥村くん、気持ひよふなって、くれまふか……？」
口に含んだままでの問いに、一樹は息を徐々に荒らげながら頷(うなず)く。唇と頬を蠢(うごめ)かせながら上目遣いに見てくる表情。可愛らしいのに妙にいやらしく、こみ上げてくる快感も相まって、残った理性は着々と押し流されていく。
「んぷっ、はぁ、はぁ……エルフは数が少ないので、確実に子孫を残すための知識を身につけています」

満足に身動きも取れない状況で、一樹は得も言われぬ高揚感に奥歯を噛み合わせていた。

＊

（は、入っちゃった……一樹のおちんちん、私の膣内に……！）

響は得も言われぬ高揚感に、小さく息を弾ませていた。

膣内に収まった異物の感触が、この上もなくはっきりと伝わってくる。

幼馴染の、片思いの相手の、勃起したおちんちん。

とうとうしちゃった。セックスしちゃった。脳裏に渦巻いた期待感が強い達成感へと置き換わり、乙女心と疼く身体を遍く至福で満たしていった。

嬉しい。すごく、すごく。勢いとは言え、ついに一樹とこの瞬間を迎えられるなんて！

歓喜のあまり「はあっ♥」と甘いため息が漏れる。痛みはあったが薬のおかげか、さして酷いものではない。むしろ快い充足感だけが全身に広がっていくみたいだった。

「お、おっきい、硬い……一樹のおちんちん、膣内広げて……あッッ⁉」

――ブシャアアッ！　ビューッビューッどびゅどびゅどびゅ！

突然、膣の奥底に熱い何かがぶち当たってきた。これが精液なのだと直感的に身体が悟る。直前まで焦らしたためか入れた途端にイったらしい。

そうと分かった瞬間、響はゾクゾクと愉悦に身震いした。彼が感じてくれたことに心からの悦びを覚えた。

「ああっ……んふ、一樹に処女、あげちゃった♥」

信じられないくらいの欲望がここに来てなおも心を色めき立たせる。もっともっと感じたい、いっぱいいっぱいエッチしたい、自分ではない別の自分が脳内で遮二無二騒ぎ立てるようで、歯止めがかからず腰が勝手にカクカクと動き始める。
「うあっ⁉　響、もう、やめ……て……！」
「はぁ、あっ、膣内に一樹のセーシ、入ってきてるぅ♥」
もっと奥へ流しこまんとお尻がぐいぐい押しつけられる。子宮にまで精液を送りこみ彼を全身で感じたい、そんな欲求が自然と自分をそうさせる。
（すごい、惚れ薬って、こんな風なんだ。こんなに大胆になれちゃうんだ……！）
今さらながらに例の薬の効能を実感した。好きだと気づいてなお何もできずにいた自分が、こんなにも淫らに大胆になりきれる。まるで別人に生まれ変わった気分だ。
響は物すごく嬉しく思い、絶対カノジョにしてもらわなきゃと自分からガツガツ腰を振り始める。
「うぐっ、おおっ、響、ちょっと待っ……うう……！」
果てた直後で敏感なためか一樹は困惑した様子で喘ぐ。
でも止められない。止められるわけがない。初めて体験する抽送行為に響は没入してしまっていた。
「やだ、いいっ、気持ち、いいっ！　硬いおちんちんずりずり擦れてる、弱いおま○こいっぱい抉ってるっ！　熱い、すごく熱い、どんどん感じて蕩けちゃってくぅ♥」

膣のヒダヒダをペニスがこするたび甘美な電流がびりびりと駆け巡る。敏感なのはこちらも同じで出入りするのがはっきり分かる。膣内がぐいぐい拡張されて圧迫感が物すごい。

子供の頃に見た以来だが彼のペニスは想像以上に大きかった。その太くて長くて硬いモノが未熟なヒダ肉を一斉に捲りあげ、腰全体が蕩けるような甘い官能を叩きこむ。全身の神経が一点に集まり、好きな男の子の雄々しいペニスを夢中になって感じまくる。

「はぁ、はぁッ、すごぉい、一樹のおちんちん、中で震えてッ――あッ!?　あああんッ♥」

――ブビュッびゅるびゅるびゅるびゅるうっ！

またしても膣内でペニスが痙攣し熱いものを放出してきた。

その瞬間、響はアクメに達した。筒状の中を精液が駆け抜け子宮口にまで当たる感触、その熱と勢いと粘膜への刺激に深い歓喜と愉悦を見出してしまっていた。

「すごい気持ちいい、セーシびゅーびゅー当たるの素敵ぃいッ♥」

破瓜の痛みなどあっという間に消えるくらい、その感覚は胎(はら)に快い。子宮を満たす充足感は、そのまま女の生殖本能をも熱く満たしうっとりと蕩かせる。

もぉ堪んない、病みつきになっちゃう――薬と恋慕で茹(ゆ)だった意識がさらなる膣内射精を求め、腰の動きを止めさせぬまま後ろ手に睾丸を握らせる。

「ひ、響、なにすん――うわぁ!?」

「ねぇもっとぉ……一樹の熱くて素敵なセーシ、もっといっぱい中に注いでぇ……♥」

ピストンに揺れる睾丸に触れ揉み解すように指を動かす。この刺激は初めてなのか彼は

目を白黒させた。けれども感じているに違いなく、射精から数秒と経たぬうちにペニスは膣内で硬度を増した。

反り返りが強くなるとヒダヒダへの刺激もさらに強くなる。甘美感がますますいや増し膣肉が狭まり「きゃん♥」と声が出る。もっともっと刺激が欲しくて指はしきりに睾丸を揉みしだき、ついにはアナルを探り当てて人差し指をつぷりと挿しこんだ。

「おぐッあああぁぁぁッ!?」

「あああああんッ、きたぁ♥　お腹ん中でびゅくびゅく出てるぅッ♥」

一樹はすぐさま大きく身震いし再び膣内でペニスをわななかせた。話には聞いていたが男もアナルは敏感なようで、睾丸側を軽く押すだけでたちまちよがって射精していた。

もちろん響も一緒にイっていた。どうも自分は膣内射精が好みみたいで、膣奥で粘液が弾けるたびにゾクゾクと震えアクメを味わった。

「んあッあああッ♥　すごぉい、何回も出してるのに、まだ勢い、収まらないぃ♥」

「はぁ、はぁ、ひ、響、お前……」

「でも、まだ、足りないよぉ……♥」

連続アクメに達してもなお、疼きがやまず響は甘えておねだりする。

「今までエレナにした分……私にも、して♥　それまで放してあげないんだからぁ♥」

自分でも淫らだと思える声音で笑いながら訴えかけると、再び腰をゆさゆさと揺すって濡れそぼるヒダ肉でペニスをしごく。

（すごぉい、私っ、こんなにもエッチになれちゃうんだ、初めてなのにこんなに気持ちよくなれるんだ……！）

茹だった意識でふと思うのは、自分は何を足踏みしていたのだろうということだ。初めては痛いと聞いていたのにちっとも辛くなんかない。薬のおかげで羞恥心もありはしない。さっさと飲んで押し倒していれば彼と死ぬほどエッチできたのに。今以上に気持ちよくなれたろうに。悩んでいたかつての自分が今は不思議に思えてならない。

「あん、あんっ、いいっ、気持ちいいよぉ、もぉ自分でも腰、エッチな動き、止まんないのぉッ～～～～あああん⁉　すごぉい、またびゅくびゅくセーシきちゃってるぅ♥」

身体はその間にも動き続け、おま○こはぢゅぽぢゅぽと音を立ててペニスを貪った。じんじんと中が甘やかに痺れ、快感が溜まるところへまた精液が噴出してくる。とめどない愉悦に肌が紅潮し汗がたらたらと頬を流れ、トロンと蕩けた瞳からは快楽の涙が滲み出る。

そんな自分を一樹は圧倒された様子で見ていた。身動き取れない中繰り返し痙攣し、切羽詰まった表情のままずっと息を荒らげ続けている。可愛い。なんだかこっちがいじめているみたいだ。大好きだからいっぱいエッチしていっぱい感じてほしいだけなのに。快楽と薬とでボヤけた頭では、それ以外のことを考えられる余地がない。

「あんっ、んんっ、何度も何度も射精するから膣内、一樹のセーシでいっぱいだよぉ……ずっとハメてても漏れ出てきちゃうぅ♥」

動き方のコツも掴み卑猥な水音を間断なく響かせる。

途中でふと気が付くと、彼は無言のままとなっていた。連続射精が気持ちよすぎて気を失ったのかもしれない。

ちょっと残念だが、抵抗する気配はなさそうなので、腰振りはやめぬまま括った手枷を外してあげる。

と、次の瞬間だった。されるがままだった彼の両腕が、急に背中に伸び強く抱き寄せてきた。

「え、ちょっ、一樹――やんッ、ち、乳首ぃ……!?」

彼は無言のまま胸の先端をぢゅるぢゅると啜ってくる。腹を空かせた赤子みたいに夢中になって口に含んで。

一方的に責めていた響は突然の愛撫に戸惑う。気づかぬうちに全身が敏感になり乳首は一層弱くなっていたのだ。舌でしつこく転がされるたび胸までじんじんと甘く痺れてきた。

「あうッ、か、一樹ぃ、乳首、強く吸い過ぎぃ……やッ、放、してぇ……あんッ♥」

思った以上に官能が強くて頭までじーんと痺れ始める。堪らず声が漏れ腰がくねる。

が、そんな程度で済みはしなかった。さらなる変化が彼女を待っていたのだ。

「あんッ、うそ、膣内で、おちんちん大きくなってる……？　すごい、まだ大きくぅ……？」

五回は出したはずだというのに萎えるどころか一回り以上も膨らんでくる。元より十分なサイズだったのだ、さらなる膨張に膣洞がおののき、新鮮な刺激に濡れヒダが悦びの悲鳴をあげる。

そこへズシンと一突きされれば、響自身も歓喜の悲鳴をあげずにはいられなかった。
「ひうううッ⁉　しゅ、しゅごッ、ひいぃんっ⁉」
子宮が跳ね上がり振動したのがいやにはっきりと感じられた。膨れ上がった立派なカリが子宮口を強く叩いたのだ。これまで以上の鮮烈な官能が腰骨にまで響いて広がった。
「いい加減にするんだ……響ッ」
自由になった手で足枷も解き、一樹はゆらりとベッドに立ちあがる。タガが外れて吹っ切れたのか、その表情は欲望に満ちていて怖いくらいだ。一度抜かれて露出したペニスは、蔓のように浮いた血管を恐ろしいくらい脈打たせていた。
「か、一樹、ちょっと、きゃっ⁉」
突然のことに惑うのも束の間、力任せに足首を取られ、仰向けで尻を持ち上げられる。俗に言うまんぐり返しの体勢にされる。
その天を向いたびしょ濡れのおま〇こに、彼の太くて逞(たくま)しいモノがズンと勢いよく突き入れられた。
「あぐッひいあいいいいッッ⁉」
「お前に、ばかり――！」
――ヌブッヌブッズヂュッズヂュッ！
「好き勝手、させ、ないッ！」
「あぁあッあぁあぁあ～～～ッッ⁉」

――ずぬっずぬっヌヂュッヌヂュッ！

響は歓喜の悲鳴をあげながら全身をのたうたせてよがってしまう。

本気になった一樹のピストンは豪快の一言に尽きた。上から斜めから角度を変えて串刺しにするようペニスを抜き挿しする。勢いあまって睾丸が当たりアナルをも叩いて蜜を跳ね散らかす。犯すくらいの激しい抽送に、しかし膣肉は大きな悦びを覚えこまされる。

「あ、当たるぅ、奥、一番オクぅ、ごりごりって、押し、開くッ、みたいにぃいッ!?」

長さまで一回り増したせいだろう、子宮口にまで容易に届き荒々しくノックしてくる。当人に自覚はないが彼女の膣洞は狭くてキツい。最深部までの道のりも決して長くはなかった。

その窮屈なおま○こを拡張せんと巨大な男根が熱く蹂躙する。ヒダヒダを掻きむしる。奥をかき混ぜる。さっきの仕返しと言わんばかりに間断なく愉悦を叩きこんでくる。

「んあッあああひゅごいいッ!?　とッ、とんひゃ、んんッ、とぶぅ、とんひゃうぅぅッ♥」

膣奥をゴツゴツと叩かれながら響はあられもなく悶え喘ぐ。もはやさっきまでの余裕などない、みるみる迫り来る絶頂感に意識は今にも持っていかれそう、脳と目の奥がチカチカと明滅し何がなんだか分からなくなってくる。

「しゅごい、これがセックしゅ、一樹のおちんちん、気持ちよすぎてこわれちゃう、頭ッ、真っ白ににゃるうぅ!!」

乳首もびんびんに立ってしまい突きこまれるたび滅茶苦茶に揺れ動く。尻たぶがぱんぱんと大きな音を立て乳房が柔らかな波紋を描き、望む望まずにかかわらず淫らな嬌声が部屋中に甲高く響き渡る。

「はぁッはぁッ、どうだ響、気持ちいいか、俺の本気、分かっただろッ……！」

「分かったァ、あぁッきもちぃいッ、感じすぎひゃうッ、もおイク、イク、イグううッ!!」

一気呵成に腰を振る一樹も汗みずくになり息を荒らげる。再度迫り来る熱い限界に肉棒がびくびく打ち震える。ぱんぱんに膨れ上がったカリが放出が近いことを知らせてくる。

響にしても限界は間近で狂ったみたいに手足がバタつく。泡立つ精液が溢れる膣口は目に見えるくらいキュウキュウと収縮し、クリトリスまでが硬く勃起し今にも爆ぜてしまいそうだ。膣奥を突かれるたび腰がくねり激しい甘美感に背筋がガクガクと乱れ躍った。

「はぁはぁ響ッ、もう、出るぞッ……響の、おま〇こにぃッ……！」

歯を食いしばった彼の口から呻きに近い声が漏れる。ベッドを軋ませ腰を振りたくり最後の瞬間へと全力で突き進んでいく。

「あッ出してぇ!!　ナカにちょおらいっ、セーシ出してぇ、中出しでイカせてぇえ!!」

響はトロトロの表情で訴えつつ尻を高く掲げあげた。

とどめとばかりに腰が打ち下ろされカリが最奥を今一度叩く。子宮が一際大きく跳ね上がり歓喜の荒波が一斉に下腹部へと押し寄せる。

これまでにない、目も眩むような快感と甘美感。
その瞬間、響はとうとう、この日最高のアクメに到達した。
「あぁぁっんぁぁぁ〜〜〜ッ♥♥」
「ぐぁぁッ、響っ〜〜おおおッ！」
「あぁぁぁぁッ出てるぅ、セーシっ、イク、またイクぅッッ♥♥」
——どくッどくッどくッどくッドクドクドクドクッ！
うだるほど熱い膣内の奥底でペニスが目いっぱいしゃくりあげ白濁を放出した。
これで何度目か、きっと本人すら分かっていない。入れてから何回も射精したため感覚が狂っている。その都度イった響でさえ回数なんて把握していない。
だが、そんなことなんてどうでもいいほど今回の射精は大量で激しかった。膣内に溜まった精液が押し出され隙間からゴポゴポと溢れ出るくらいだ。
これがまた気持ちよすぎて響は立て続けに絶頂していた。出される直前と出された直後、五秒と挟まない連続アクメに身体全部が飛び散ってしまう気分だった。
「はあはあ気持ちいいッ、一樹のセーシどくどく入ってくるぅ、子宮ぱんぱんになって、ふ、膨らんじゃうよぉぉ♥」
惚れ惚れするほどの熱い濁流の感触に、響は心から酔い痴れた。

＊

「うわぁぁぁぁぁんんっ!!」

幼馴染がベッドに顔を伏せ号泣するのを、一樹はすぐ近くで眺めていた。
散々乱れ、どうにか落ち着いた頃である。二人とも身なりを直し気まずさに耐えかねたところで、こうなった次第だ。
一樹は困惑の表情で――実際困惑して――どうなだめるべきか迷った。
「さっきは私どうかしてたのよ！　自分からそのっ……お、襲ったりして……あれじゃ変態じゃない!!」
「あー、その……薬、惚れ薬のせいなんだろ？　気にすんな、っていうか……無理か……」
やられた側でさえ気にしているのだから無理に決まっているだろう。確かにあれは恥ずかしすぎる。立場が逆ならレイプ犯としてお縄確実だ。
って言うか俺、被害者なんだよな。なんで俺が慰めなきゃなんないんだ？
不意にそう思って一樹が悩む中、響はがばっと身を起こした。
「さっきのことは忘れて!!」
「え……？　ええーっ!?」
「いいわね!?　分かった!?」
「は、はいぃ！」
問答無用で納得させてから響は背を向け保健室を出ていこうとする。
これでいいのかと釈然とせぬまま一樹は立ち尽くすばかり。
と、ドアに手をかけたところで、響がぽつりと言葉を漏らす。

不思議だ。全員に言えることだがエッチすると妙な特別意識が芽生えるから不思議だった。
（クラス全員とセックスして全部ナマで出して。ここは天国か、それとも地獄かよ……？）
さすがに身体は疲弊しきって節々が悲鳴をあげているも、押し寄せる快感は途切れることがなく湧きあがる欲望にも際限がない。まだだ、まだセックスしたい、おま○こを突きたい、精液を注ぎ込みたい、昂った衝動が身の内を支配し自分でも怖いくらいだった。
「――もうっ、ほかの子ばっかり相手しちゃってぇ……！」
だが一息ついている場合ではない。想いを寄せてくれる二名がまだ残っているのだから。
「わ、私だって、ほんとは一樹と……したいのにぃ♥」
「彼女なんですから、ほかの子よりいっぱいセーシ注いでくださいね♥」
「響、エレナさん……うおおもちろん！」
中出しアクメでぐったりと弛緩し、もしくは物欲しさから女性同士で絡み合い。それら様々な女子たちを押し退け、恋人と幼馴染が半裸の肢体を擦り寄せてくる。
今気づいたが二人はさっきの行列にいなかった。後でたっぷり堪能する気でいたらしい。拗ねた様子の響ですらトロンとした目をしていて、どちらもおま○こがびしょ濡れだった。
一樹としても無論、放っておく気なんてない。並んでおねだりしてくる二人に飛びかからんばかりに手を伸ばした。
「あん♥　一樹、やっぱり私がいいのね。突いて、あんもっともっとぉ♥」
「はぁはぁエレナさん、もう奥までトロトロっ……気持ちいい、ちんぽ溶けそうだ！」

金髪エルフを床に押し倒し抱きあうようにして腰を押しつける。両足を大きく開く彼女、そのあらわなおま○こに向けて、ずんずんとペニスを強く抜き挿しする。
「あああッ感じるぅ、一樹の硬いおちんぽぉッ♥　素敵、これいいのぉ、どんどんおま○こ馴染んじゃううッ♥」
奥まで深く掻き分けるごとに柔らかな粒ヒダがきゅうきゅうと吸いつく。惚れた男に合わせてくるのか、前にも増して隙間なくフィットし凹凸（おうとつ）の感触をより強く伝えてくる。濃密な擦れ合いが互いを高め二人とも夢中で腰をぐりぐりと押しつけあう。
「ぐぐぐ一樹ぃ、結局エレナからなんてぇ……あっ、やだ、ちょっと急に……!?」
響が嫉妬で怒るより先に一樹はそちらにも素早く手を出す。エレナの隣で四つん這いにし、お尻を高く突き出させると、スカートを捲っておま○こを露出させ、エレナに替わって一息に貫いた。
「ひゃんっ♥♥　い、いきなり、オクぅ……!?　やんダメぇ、初っ端からオクばっかぐちゅぐちゅしないでぇえッ♥」
待たせた埋め合わせをしてやらねばと深部をカリでしつこく抉る。どうやら響は膣奥の粘膜がとても敏感で弱いらしい。行き止まり少し手前をこすると感じ方が目に見えて変わるのだ。なので早速奥の濡れヒダを念入りにこすって刺激してやる。
「ダメぇ、ソコ、よ、弱い、のぉッ……ああんッ、オク、感じちゃううッ♥」
「はぁはぁ、響、か――可愛い、よ、すげぇ可愛い……!」

なんとも気持ちよさそうにして腰をくねらせ喘ぐ幼馴染。
その震える背中に向けて、一樹は言った。
「響、俺、お前のこと――――す、好きだと、思う、マジで……！」
「はぁはぁ、え、一樹――やだ、急にそんなッ、あッあぁあぁんんッッ!!」
――ぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっぐちゅっグチュッグチュッずちゅっずちゅっ！
一樹は猛然と腰を振り立て幼馴染のヒップを弾く。ストロークを短く速くして奥のざらざらを激しく擦り込む。睾丸を叩きつけ入り口を刺激しお尻をしっかと抱え込んで、交尾に没頭する獣さながらに身を乗り出してピストンを繰り返す。
何かのスイッチが入ったのか、響は急に声を高くしアップの髪を振り乱してよがった。ガクッと腕が折れ床に頬をつき、それでもお尻を大きく突き上げて激しいピストンを進んで受け止める。
「気持ちいいッ、一樹ぃ、私も好き、大好きぃいッ！　ねぇもっとしてぇ、おちんちん、私のおま○こにもっともっとぉ!!」
「あン、響ったらすごい声っ、負けてられない、一樹ぃ、私にももっとぉ♥」
「もちろん！　エレナさんも好きだよ、おおっ！」
「あはあぁ♥　きたぁ、一樹の硬いの、おま○この奥にぃ♥」
――ぬちゅぬちゅズチャズチャぱんぱんぱん！
続けざま隣のエレナに挿入しこちらも一気にスパートをかける。柔らかな粒ヒダを繰り

返し捲り奥から愛蜜をエラで掻き出す。白く蜜が泡立つ膣口に指を這わせてクリトリスを摘み、さあこれでもかと言わんばかりにしごいて感じさせ追い詰めていく。
「あはあッアッアッそれ感じるううッ‼　すごいぃ、いッ、イク、イクッ、イっちゃううッ‼」
「はあはあエレナさんイって、もっと感じて、ほら響もっ！」
「はぁあまたぁッ⁉　一樹のバカぁ、弱いトコばっかッ、そんなにしたら、わたッ、もう私ぃッ‼」
　またも続けざま響に入れて奥をシェイクし尻たぶを弾く。こちらはアナルに指を這わせくすぐるようにして刺激を追加、効果は即現れ羞恥もあらわに響は快楽にのたうつ。
「お尻ダメぇえイクッ、イクッ、もぉらめイっちゃうのぉおッ‼」
「はあはあ、俺もイキそうっ、出すぞ二人とも、もう出るッ！」
「出してぇ、一樹のセーシいっぱい出してぇッ♥」
　床に仰向けの隣のエレナが、自分からラビアを開いて言った。
「かけてぇ、ここに、一樹の熱い赤ちゃん汁ぅ♥」
「私にも頂戴ッ、ここに、おま○こに一樹の赤ちゃんの素ぉ♥」
　響も左手を後ろに回し、大量の蜜で濡れそぼり光る桃色のラビアを開いてみせた。
「きて♥♥　恋人のエッチなおま○こにどびゅどびゅしてぇ♥♥」
「うおおおっ！　二人とも、で、出るぅッ！」

「「はあああああンンンン♥♥」」
——どくんッ、どくどくどくどくぶびゅるるぶびゅるッぶびゅ〜〜ッ！
咄嗟に引き抜いた肉棒の先から大量の白濁が噴水のごとく噴き出し、飛び散った。
二人してアクメ寸前だったのか、ラビアに粘液がかかった途端にぶるぶると腰をわななかせ達した。とめどなく溢れる愛蜜の中に白い精液が混ざりこんで、ぱっくり開いた粘膜の奥に沁みこむようにして吸われていく。なんだかこれだけで妊娠しそうで目にした一樹は興奮にぞくぞくと身震いした。
「一樹のセーシ、おま○こに沁みてっちゃう……♥　次は子宮に沁みこませてね♥」
「ダメよ、次こそは私なんだからぁ……ね、一樹？　今度こそオクで射精してよね♥」
「フフッ、二人とも淫乱だな。だがこっちも忘れてもらっては困る」
はたと気づくと。エレナと響を相手する間に、ほかの女子たちが周りを取り囲んでいた。
「まだ一回しただけだぞ。一度火の付いたサキュバスがこの程度で終わると思われては困るな♪」
「こうなったらとことん相手してもらいますよぉー。今後の発明のためにも。ムッフフ♪」
彩乃、唯を筆頭に、クラスの女子たちが寄ってたかって身体をまさぐってくる。
無論エレナと響もこれで終わりだなどと言うはずがない。媚薬の効能はまだまだ持続中なのである。
俺、ひょっとして今日ここで腹上死するかも。

そんなことを、ふと考える一樹だった。

＊

「――ふぅー、イテテ……腰はビキビキだけど、すごい体験だった」

第二ラウンド開始から、およそ一時間が経過した頃。

一樹は全裸で清々しい表情を浮かべていた。

教室内はエッチなにおいでいっぱい。所々に白濁が散乱し、裸の女子たちがヒクヒクしながら恍惚の表情で横たわっている。全員が全員、一樹とセックスしまくった結果だ。

「何がふぅー、よ。安らぎに満ちた顔して」

と、女子たちの間から二人だけが起き上がってにじり寄ってくる。響とエレナだ。

「エレナだけじゃなくほかの子たちにまで手を出すなんて。おまけにみんなの前であんな恥ずかしいコト……ああもう、あんたに初めてあげるんじゃなかった、コノ！」

「ぐへっ、いでででっ！　し、死ぬ、苦しい……！」

「さすが一樹くん、すごい精力。やっぱり私の目に狂いはなかったわ♪」

響が首を絞め、エレナがニコニコしつつ腕に抱き着いてくる。

怒られるのも、まあ無理はない。二人の立場からすればそれが普通の反応だ。それに媚薬のせいとはいえクラスまとめて乱交したと知れたら、文字通り大事となるだろうから。校則だの青少年ナントカ法だの、いろいろ引っかかって大変だろう。

（ま、でも大丈夫なんじゃないかな。ヴェルス魔法学園は大きなトコだし、ちょっと問題

あったくらいでまとめて退学とかならないだろ普通）

ちょっとどころではない話だが、とにかく表沙汰にはならないだろうと思う。クラス全員が関係者なので処罰するにも難しく、学園側としてもスキャンダルなどは御免なはずだ。エルフやサキュバスという希少な異種族生徒もこんな形で失いたくないに違いない。

――が、しかし。

一樹のこの安易な推測が、いともあっさりと外れることになろうとは、本人はもちろん、ほかの女子たちすら想像もしていなかった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

アンリアルコミックス104

小悪魔カノジョ

KUMAKAWA
Hiroshi illustration by Hisasi

Hisasi

presented by kill time communication

本小説の原作コミック『かたこい』シリーズや、片想いの男の子にドキドキすると巨乳化して発情してしまう悪魔っ娘のラブコメディ『ツン♥デビ』ほか、可愛らしく誘うエッチな美少女満載！

成年コミック

A5判　943円+税

書籍版・電子書籍版大好評発売中!

KTC 編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ！ キルタイムコミュニケーション 検索